

しづたに

閑谷学校への願い — 津田永忠 —

つだながただ

「わたしの役目は、岡山藩の人々の生活を豊かにすることにある。そのためには、人々が身分を問わず、学問にはげむことが必要なのだ。しかし、武士のための学校はあるが、庶民のための学校はない。何とかして、学問の場をあたえてやりたいものだ。」

学問好きで、教育にも深い考えをもつていた岡山藩主・池田光政は、学校奉行の津田永忠に、このようないいを熱心に語りました。

「永忠、わたしの願いが後世に続くような、永久に残る庶民の学校を、閑谷につくってはくれまいか。」

永忠は、光政の言葉を重く受け止め、「永久に残る学問の殿堂」をどのようにすれば建設できるのか、あれこれと思いをめぐらせました。

(何よりもまず、数百年、雨や風にたえうる講堂をつくらねばなるまい。そのためには、材木は虫のつかないクスノキを使用する。屋根は雨もりを防ぐために、三重構造にして、備前焼のかわらにする。床は高くして、くさらないようにうるしをぬる。くぎはさびるので、いっさい使



津田永忠像 岡山市中区 沖田神社



わないようにしよう。)

しかし、永忠が思^{なが}いえがいた、じょうぶでりっぱな講堂を建てるためには、巨額^{きょがく}な費用が必要です。家臣の中には、

「農民が学問をして何の役に立つのか。」

「藩^{はん}の財政がきびしいときに、さらに新しい学校を建

てるなど、殿^{との}は何をお考^{かう}えなのだ。」

と、反対する声も多くありました。

永忠の心は、ゆらぎましたが、

「これから時代は、庶民^{しよみん}も学問をすることが必要になつてくる。」

と、強く自分に言い聞かせて、一六七〇年、閑谷学校^{しづたに}の建設を始めました。

二年後、光政^{みつまさ}は、息子の綱政^{つなまさ}に藩主^{はんしゆ}の座をゆずりました。そのころ、岡山藩は、大雨や洪水の影響^{こうぜい}で不作^{えいきょう}が続き、大飢饉^{さきん}にみまわれていました。永忠は、藩内各地にある学校を一時閉校^{ひいこう}にし、学校の運営費用を使って、うえた人々を助けるように提案しました。どこ



閑谷学校 備前市

ろが、飢餓を乗りこえた後も、多くの学校は再開されませんでした。

このようなどきに、閑谷学校の存続を強く願っていた先代の光政がなくなつたのです。

「このままでは、閑谷学校も廃校になることは火を見るより明らかだ。これから先、どのようにすれば、閑谷学校を守り通すことができるのであろうか。」

ねむれない夜が続きました。永忠は、講堂に正座をして静かに目を閉じました。谷川のせせらぎが、あのころと同じよう聞こえています。

『庶民に広く学問の場をあたえ、岡山藩の人々の生活を豊かにしたい。』

と、熱く語る光政のすがたが、あざやかによみがえってきます。月の光がうるしぬりの床に反射して、永忠をやわらかく照らしています。

「そうだ。わたしがここでくじけてはいけない。先代の願いをかなえるためにも、そして何より、岡山藩の人々の生活を豊かにするためにも、閑谷学校を完成させなくては。」



改めて強く決心した永忠は、綱政に願い出ました。

「閑谷学校は、庶民の教育の場としてぜひ必要なのです。皆が学問にはげむことこそ、岡山藩が榮えることにつながるのでです。どうかお力を貸してください。私も生涯をかけて、この学校のためにつくします。」

永忠の必死なすがたに、綱政もついに心を動かされたのです。

永忠は、長い年月をかけて手続きや改築を進めました。藩の財政に左右されないよう、学校独自の運営費用として約二百八十石を使えるようにしました。茅葺きだった屋根をじょうぶな備前焼のかわらにかえ、敷地の周りにも石垣や門を築きました。そして、一七〇一年、全ての建設を終えることができました。着工から実に三十二年の年月が過ぎていきました。

「殿、ごらんください。庶民のための学問の殿堂が、ようやく完成をいたしました。殿の願いは、ここで学ぶ人々によつて、永久に受けつがれていくことでしょう。」

光政の墓前で手を合わせ、完成の喜びを告げる永忠の目には、なみだが光っていました。

この閑谷学校で学んだ多くの人々が、岡山の発展のためにつくしたのです。

1 主題名 地域のためにできること

2 主題設定の理由

(1) 内容項目について

中心とする内容項目は、C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛すること。」である。この時期の児童は、我が国の国土や産業、歴史などの学習を通して、我が国の国土や産業の様子、我が国の発展に尽くした先人の業績や優れた文化遺産に目が向けられるようになることから、受け継がれている我が国の伝統や文化を尊重し、更に発展させていくこうとする態度を育てることが大切である。

自分から積極的に地域に目を向け、様々な人々との交流を深めながら、地域のために自分には何ができるかを考えたり、地域文化の発展に努めようとしたりする心構えを育てたい。

(2) 児童の実態について

児童が生活している地域社会においては、周囲に多くの文化財があり、たびたびそれらに接したり伝統的行事に参加したりしている。しかし、多くの場合、その場限りの楽しみにしてしまい、郷土の歴史や文化に無関心であったり、先人の苦労や周囲の人々から受けている恩恵に気付かないままでいたりする。

郷土の自然や文化についての理解が深まるこの頃に、我が国の教育の発展を願ってつくられ、しかも、現在も教育の場として生き続けている閑谷学校を取り上げ、歴史的事実を正しく理解させた上で、郷土の文化や伝統を大切にし、これらを受け継ぎ発展させていくべき責務があることを自覚して、発展に努めていこうとする心構えを育てたい。

(3) 教材について

今から約300年前、日本最古の庶民教育の場として閑谷の地に学校が建設されるまでの物語である。学校奉行の津田永忠は、「永久に残る学問の殿堂」をつくりたいという岡山藩主・池田光政の願いを受け、閑谷学校の建設に着手する。しかし、飢饉による財政難、藩校の一時閉鎖、光政の逝去などの多くの困難に直面し、学校建設の継続を思い悩む永忠の姿が描かれている。身分を問わず、皆が学問に励むことが、岡山藩の繁栄につながると考え、郷土のために尽くした永忠の心情を考えさせたい。

◇板書例

<p>○地域（郷土）のことを考えて行動したこと</p> <p>◇郷土のことを考え郷土の発展のためにつくそうとする気持ちが大切だ。</p>	<p>光政の墓前で手を合わせた時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ようやく完成することができて、うれしい。 ・殿の願いは、永久に受けつがれるだろう。 ・この閑谷学校でたくさんの人々に学んでほしい。 	<p>場面絵</p> <p>講堂に座つて、目を閉じている 永忠の絵</p>	<p>廃校になりかけた時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここであきらめではない。 ・どのようにすれば、閑谷学校を守り通すことができるのだろうか。 ・どんなことがあっても、この閑谷学校を完成させたい。 ・岡山藩の人々の生活を豊かにしたい。 	<p>光政にと言われた時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・殿の願いをかなえたい。 ・庶民にも学問をする場が必要だ。 ・数百年たえられるりっぱな講堂をつくりたい。 	<p>めあて 永忠は、どんな思いで閑谷学校をつくれたのか 考え方。</p>	<p>写真 (閑谷学校)</p> <p>写真 (津田永忠)</p> <p>・庶民の学校 ・津田永忠 ・池田光政 ・今から約三百年前</p>
----------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------

◇参考

津田永忠（1640～1707年）。池田光政・綱政と二代の藩主に仕え閑谷学校の経営、後楽園の造園などに力を注いだ。池田光政（1609～1682年）。岡山藩主として新田の開発や教育政策などに力を注いだ。

3 ねらい

津田永忠がどのような思いで閑谷学校を建設したのかを考える中で、郷土のことを考え郷土の発展のために尽くそうとする気持ちが大切なことに気付き、地域の一員として主体的に地域のために活動していくこうとする心情を育てる。

4 展開

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と児童の心の動き	指導上の留意点
1 閑谷学校の写真を見て話し合い、めあてをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 閑谷学校についてどんなことを知っていますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代に建てられた庶民のための学校。 ・日本遺産に認定されている。 ・講堂が国宝になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・閑谷学校の写真を見せたり、閑谷学校やその時代について説明を加えたりすることで、閑谷学校への関心をもたせるようにする。
	永忠は、どんな思いで閑谷学校をつくったのか考えよう。	
2 「閑谷学校への願い－津田永忠－」を読んで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 光政に「庶民のための学校をつくれないか。」と言われた永忠は、どんなことを考えたでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・殿の願いをかなえたい。 ・庶民にも学問をする場が必要だ。 ・数百年たえられるりっぱな講堂をつくりたい。 ○ 講堂の床に正座し、静かに目を閉じた永忠はどんなことを考えたでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・ここであきらめてはいけない。 ・どのようにすれば、閑谷学校を守り通すことができるのだろうか。 ・どんなことがあっても、この閑谷学校を完成させたい。 ・岡山藩の人々の生活を豊かにしたい。 ○ 光政の墓前で手を合わせた永忠は、どんなことを思ったでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・ようやく完成することができて、うれしい。 ・殿の願いは、永久に受けつがれるだろう。 ・この閑谷学校でたくさん的人に学んでほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の力で人々の生活を豊かにしたいという光政の願いや、数百年耐え得る庶民のための学校を建設することの意味を捉えさせるようにする。 ・ワークシートに書くことで、飢餓による財政難、光政公の逝去など、閑谷学校の存続が困難な状況に追い込まれたときの永忠の気持ちを多面的に考えさせる。 ・「それでも完成への努力を続けたのはどうしてか。」と問い合わせ、郷土の発展のために尽くそうとする永忠の思いを捉えさせるようにする。 ・郷土の発展のために、苦労しながらも主体的に尽くしたあの満足感を感じとることができるようにする。
	郷土のことを考え郷土の発展のためにつくそうとする気持ちが大切だ。	
3 地域のことを見て行動したことについて振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域（郷土）のことを考えて、何かしたことがありますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・学区民運動会に参加していたが、地域のためという意識はなかった。 ・町内の掃除に参加したとき、地域がきれいになるようにと思って頑張った。 ○ みなさんが住んでいる地域にも、郷土の発展に努めた人物がいますので、紹介します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分と郷土の関わりについて振り返らせ、自分も地域の一員として、郷土の発展のために主体的に活動しようとする意欲を高めるようにする。
4 先生の話を聞く。		<ul style="list-style-type: none"> ・教師の説話により、郷土の発展に努めていこうとする意欲を高める。
	自分も地域（郷土）のためにできることを考えて行動したいな。	
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ・郷土の人々の幸せや郷土の発展のために努力することの大切さに気付くことができたか。 ・地域の一員として郷土のために主体的に活動しようとする意欲を高めることができたか。 	

5 他教科等との関連

社会科の歴史の学習の中で、地域に残る遺跡や文化財、地域の発展のために尽くした人物を調べる活動に発展させたり、総合的な学習の時間の地域学習の一環として、祭りや資源回収などの地域の行事に主体的に参加する活動につなげたりしていきたい。

道徳ワークシート

閑谷学校への願い — 津田永忠 —

6年()組()

○講堂の床に正座し、静かに目を閉じた永忠はどんなことを考えていたのでしょうか。

